

【書評・紹介】

板橋春夫著『出産 産育習俗の歴史と伝承「男性産婆」』 叢書 いのちの民俗学1
(東京, 社会評論社, 2009年1月, 254頁, 2000円+税)

林 美 枝 子

表紙画像

出産儀礼や産育を研究する上で、先行研究の古典は常に大藤ゆきの『児やらい』である。筆者が、この古典に倣うほど読みつがれる出産関連の研究書を目指して、主に2000年以降の研究論文等を編集したものが本書である。

大藤が戦前に七歳の氏子入りまでを著した『児やらい』に、生児が一人前の若者になる前のタフサギ祝までを加筆してこの古典を再発行した1968年頃は、既に日本の社会では核家族が増え、分娩の半数以上が病院施設で行われるようになっていた。母から娘、姑から嫁へと継承される自宅分娩の作法や産育の儀礼は一時代前のものになりつつあった。都市化と近代化の流れに棹差すように大藤は、その「まえがき」で「歴史をしっかりとつかんでおかねば、新しいものも正しい成長をとげることはできない」、「日本の風土で育つ日本の子どもには、日本の子育てのつみかさねの上に立た

ねば、どうしても無理が起こる」と述べている。

この古典から40年を経てまとめられた本書は、単に出産の民俗に関する研究論文集ではなく、民俗学とはどのような学問であるのかを考察する上でも多くの示唆を受ける一冊となっている。

民俗学は遡及的に時間軸を利用する学問で、生きられている現在の習わしの意味づけを辿ることが結果的にその特定の民俗項目の歴史を記述することになる。伝統的産婆の存在や、その役割が近代助産婦に代替されていく様子に言及している先行研究としては、文化人類学領域ではあるが松岡悦子の出産や助産に関する著作や、産む性としての語りから始まる吉村典子の著作が知られている。それらは現在の出産現場に何らかの問題意識を持って研究に臨み、遡及的に伝統的産婆の助産技術に言及することで、その解決策を考察する立場をとっている。一方本書は、失われた助産の技術や伝統的産婆を通して現在の出産のよりよい在り方を模索することを目的としているわけではない。民俗の継承にとって重要なことは繰り返され記憶されることであり、しかしそれが特殊なものとなり、やがては途絶えた理由を探ることが民俗学の重要な使命であると筆者は述べている。本書ではそうした途絶えた民俗の1つとして主に「産婆」だけではなく「男性産婆」についても調査研究し、事例を通してその実態や意義を考察している。

本書の構成は以下のとおりである。

第1部 出産儀礼

いのちの民俗学、通過儀礼の新視角、出産から学ぶ民俗

第2部 産育の歴史

いのちと出産の近世、トリアゲバアサンから助産師へ

第3部 伝承・男性産婆

トリアゲジサの伝承、赤子を取り上げた男たち、民俗研究と男性産婆、男性産婆の伝承

第1部では新たな生命過程論を模索することで通過儀礼研究に新視角をもたらすことの必要性を説き、その兆しとしての諸研究を紹介している。また筆者は新視角の1つとして「いのち」への眼差しを挙げ、そのためには民俗学の研究を狭義の通過儀礼研究からより範囲を広めて調査・分析する必要性を説いている。

第2部では江戸時代の上級武士の日記からその子供達の出産に関わる部分を示し、当時の助産がトリアゲババとコンダキ等による連携技術を要したことを指摘した。さらに先行研究から、間引きを殺人として認識していなかった伝統的産婆は生まれた命の生殺与奪権を有していたこと、しかも「いのち」をこの世に安置する呪術的な役割も果たしていたと説いている。近代化とともに助産の役割を職業とした当時の助産婦が、子供のいのちを、選択するものから生かしていくものへと変化させ、富国強兵の一翼を担ったことにも言及している。

第3部では、男性助産師の是非をめぐる近年の論争に、貴重な一石を投じる可能性のある「男性産婆」の民俗に関して報告している。「男性産婆」は赤不浄を超越した存在であり、産婦は身近な助産技能の持ち主に対して性別に関わり無く信頼を寄せたことが事例から理解できる。

本書の副題ともなっている「男性産婆」について、筆者は「男性の出産介護者を特殊なものとして認識するようにしたのは、近代産婆制度確立の結果」であると、男性産婆を「助産史にきちんと位置づけるべきである」と述べている。確かに伝統的産婆に関しては専門職に駆逐されたという状況が妥当ではあるが、「男性産婆」の場合はむしろ医療従事者に対するジェンダー・カテゴリーの結果でもあったと言えよう。法的に助産の専門家が女性に限定されたことや、初期の医学専門学校が男性のみに門戸を開いたことなどは、今に至る「医師は男性、看護・助産は女性」といった性別役割への拘りの源流である。

むしろ本書において興味深いことは、筆者が事例とした男性産婆が伝統的民俗医療の担い手であったり、馬医であったことが説明されている点である。彼らはむしろ現在の男性産科医に類似した領域にいた者であったと思われる。視覚障害者の男性産婆の伝承も、産婦の羞恥心とその存在意義を関連づけるより、彼らが既に鍼灸や按摩を生業としていたことこそ重要であろう。つまり、「男性産婆」が途絶えたのは、医療の専門職化とジェンダー・カテゴリーによる二重の排除の結果であったと言えよう。

また筆者は、かつての産婦の羞恥心が現在の産婦の羞恥心とは異質なものではないかとし、その予察に関して今後の論証の必要性を課題として記している。この羞恥心の問題を導入するために、産婆が女性に特化されていったのは受け手の要望であるという先行研究を紹介しているが、「男性産婆」と男性助産師を産婦の羞恥心の問題で一括りに俎上に乗せることには違和感を覚える。「出産とその後続く性的羞恥を伴う産婦へのケアなどの場面をあえて男性にゆだねることができるか」という問題が現代の男性助産師導入における課題の1つであることを紹介しているが、助産師は助産師であると同時に看護師でもある。医師の職能がジェンダーを超越するなら、看護、助産の職能もまたジェンダーを超越するものだからである。しかし、男性性に割り当てられたものは恐怖の対象となるが、女性性に割り当てられたものはそう

ではないというジェンダー・カテゴリーによる差別的な価値意識の付与の結果がここにも1つ実証されているのではないだろうか。産婆の伝統的民俗の記述の最後に、「トリアゲジジもいたらしい」と一行で言及される存在でしかなかった事象の中に、当時の助産の知恵や技術が豊かに眠っているかもしれないことを示唆した筆者の学問的功績は、それだけに高く評価されるべきものであろう。

繰り返しになるが、筆者は、民俗学を、民俗を生成した社会や信仰に言及する学問であり、一昔前の知識を学ぶことで習わしを意識化することを目的とした学問であると捉えている。産育の現場で今も継承されている習わしの意味を探る上で、本書が新たに読みつがれる一冊になることを評者も望むものである。

参考文献

大藤ゆき

1968『児やらい 産育の民俗』岩崎美術社

松岡悦子

1985『出産の文化人類学 儀礼と産婆』海鳴社

吉村典子

1985『お産と出合う』勁草書房

1999『出産前後の環境 からだ・文化・近代医療』昭和堂

(はやし・みえこ／札幌国際大学)